

11 七宝桃色暈花瓶

瀧川惣助
一点

明治二十二年（一八八九）
無線七宝
径二・七、高三五・四



瀧川惣助（一八四七〜一九一〇）の名前は、絵画性の強い無線七宝の大成者として知られている。陶磁器商を営んでいた瀧川は、七宝家としては後発であり、しかも七宝業が盛んでなかった東京を拠点としていたため、他者との差別化を図るためには新機軸を打ち出す必要があった。尾張の七宝工であった塚本貝助（一八二八〜九七）らの協力を得て、瀧川が取り組んだのが有線七宝から植線を取り除くことであった。植線は異なる色の七宝釉が焼成中に溶け合って混色しないように釉薬同士を区画するもので、それと同時に凶様の輪郭線ともなるため、当時の七宝制作には欠かせないものであった。瀧川本人の履歴によれば、明治十二年（一八七九）には新式の七宝を開発したとあり、これが植線を使わない無線七宝の端緒となったものとみられる。

本作品は、桃の花を連想させるピンク色を、口縁から裾にかけて濃色から白に近い色まで徐々に色調を薄くして、美しいグラデーションで表わしたものである。一見すると陶磁器にも見間違えるほど滑らかな表面の艶と自然な色の変化で、これが七宝であるとは当時の人々には信じられなかったであろう。瀧川はその頃すでに無線七宝による絵画的な額装形式の平面作品を制作していたが、イギリスからの注文で無線七宝による卵色暈かしの花瓶の制作を成功させ、明治二十二年春の日本美術協会の展覧会に出品して金賞牌を受賞した。本作はそれを桃花色で試みたもので、同年十一月の東京彫工会第四回競技会に出品され、その後、本人の希望により日本美術協会会頭佐野常民を通じて献上された（『日本美術協会報告』第二十四号、明治二十二年十二月）。なお、作品本体には瀧川の銘はない。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

明治美術の一断面——研ぎ澄まされた技と美

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 82

編集 宮内庁三の丸尚蔵館
制作 株式会社 東京美術
翻訳 黒川廣子
発行 宮内庁
平成三十年十一月三日発行

© 2018, The Museum of the Imperial Collections, Sanjōmaru Shōzōkan